

『袖珍 英和節用集』における仮名遣い

呂 麗 敏

一、はじめに

国語史資料研究における洋学資料において、英学資料の一つである、明治四年に刊行された『袖珍 英和節用集』初編および明治五年に刊行された『袖珍 英和節用集』第二編の内容的書誌調査をし、これまで、その成立を文献的に考察してきた。

結果として、『袖珍 英和節用集』初編の編纂に際し、『英吉利単語篇』（慶応二年）系のもものと『英和对訳袖珍辞書』（文久二年）系の辞書が影響を与えたことが明らかになった。これに對して、『袖珍 英和節用集』第二編は、上述した『英和对訳袖珍辞書』系の辞書と『英文熟語集』（慶応四年）が典拠であることを論証できた。

そのうち、典拠である『英吉利単語篇』系のもの、『英和对訳袖珍辞書』系の辞書と『英文熟語集』について、『英和对訳袖珍辞書』系の辞書と『英文熟語集』には、訳語に振り仮名が振られていない、これに對して、『英吉利単語篇』系のもの（本論では『通俗・英吉利単語篇』（明治四年）を指す）には、訳語に振り仮名が振られている。

だが、『袖珍 英和節用集』初編のものは『通俗・英吉利単語篇』のものとは不一致の部分認められ、「イの部」を例として、次のような不一致が見られる。（一）内に『通俗・英吉利単語篇』訳語の振り仮名を示す。岩イワ（イハ）、礁（海中ノ）イワ（イハ）、一時イットキ（ルビなし）、無花果イチジク（イチマク）、野猪イノシ、（キノシ）、一行イチキヤウ（ヒトクダリ）、一週イツシユウ（ヒトマハリ）、一分時（二時六十分ノ一）

イチブンジ(ルビなし)、一秒時(二分時六十分ノ一)イチビヤウジ(イチビフジ)等のような例がある。

以上のようなことから、『袖珍英和節用集』には仮名遣いに對する姿勢を窺える。仮名遣い資料としての価値もまたそこに認められる。そこで、本論では実態としての仮名遣いの研究とし、『袖珍英和節用集』に基づく仮名遣いの検討を試みることにする。

二、『袖珍英和節用集』における仮名遣い

『袖珍英和節用集』の仮名遣いとして、僅かの問題例を除き、独自の統一性を求める傾向が見られ、歴史的仮名遣いでも定家仮名遣いでもないものが行われている。次に、「訓読み語の仮名遣い」と「字音仮名遣い」と項目を分けて、それぞれの用例を示す。用例の所在を示すのに、漢数字は編、アラビア数字は丁数、オ・ウは表・裏である。『袖珍英和節用集』の振り仮名の部分の「片仮名」は論文中に「平仮名」に用い直す。

A、訓読み語の仮名遣い

1、え(㊀)・え(ye)・え(wa)

平安前期(十世紀前半)には、「ア行のエ」(㊀)と「ヤ行のエ」(㊁)の区別が失われ、鎌倉時代に入って「え/え」の混同も始まったようである。「エ」について、『袖珍英和節用集』には、語頭において、内訳は以下のものである。

えらぶ撰ブ(二77オ)、えらみ撰ミ(二77オ)、えらみて撰人(二77オ)、えらむ撰ム(二77オ)、えりだす撰り出ス(To look out)(二77ウ)、えりだす撰り出ス(To pick out)(二77ウ)、えりのける撰り除ル(二77ウ)、え画(一83オ)、え餅(一83オ)、えうり画商(一83オ)、えかき画工(一83ウ)、えき疫(一83オ)、えのぐ繪具(一83ウ)、えぶくろ胃腸(一83ウ)、えらみ撰(一83ウ)、えり領(一83オ)、えりまき襟巻(一83ウ)、えれき電光(一83ウ)、えきに益ニ(二77ウ)、えくぼ笑顔(二77オ)、えふておる酔テ居ル(二157ウ)、えりわかるる選り分ケル(二157ウ)

2、お・を

平安後期(一〇〇〇年頃)から、「お」と「を」の混同が始まり、主に和歌の世界ではあるが、定家仮名遣い(『下官集』)

が第一に「おーを」を挙げていることでも、「お」と「を」が鎌倉時代に同音になっていたことは明らかである。『下官集』において、当時のアクセントの相違に基づき使い分けようとしている「おーを」について、『袖珍英和節用集』には、語頭において、以下の数例を除き、「お」に統一している。

をしへ教(術)〔二24オ〕、をほりに終リニ〔二26ウ〕、をほりに終リニ〔二26オ〕、をほりの終リノ〔二26ウ〕、をほつかなき覚束ナキ〔二27オ〕、

3、語中・語尾のハ行、活用語尾

また平安時代には「ハ行転呼音」と言って、「語中・語尾のハ行音がワ行になる」現象が現れ、いわゆるハ行転呼音の結果で、「お・を・ほ／え・ゑ・へ／い・ゐ・ひ／う・ふ」など、同音化していたものに対して、『袖珍英和節用集』には、表記の上で、ハ行音に統一しようとする特徴がある。

あしきにほひ悪臭〔二66ウ〕、うぐひす鶯〔二46オ〕、うたがひ疑〔二45ウ〕、かほ顔面〔二26オ〕、かほかけ面衣(女ノ)〔二29オ〕、かほつき顔色〔二28オ〕、かは河〔二25オ〕、かは皮〔二

25ウ〕、かはうを河魚〔二29オ〕、かはき乾燥〔二26オ〕、かはぐち河口〔二28オ〕、かはせてがた為替手形〔二30ウ〕、かはせや為替屋〔二29ウ〕、かはどこ河道〔二28オ〕、かはなめし革匠〔二30ウ〕、かはやなぎ水楊〔二30オ〕、かはらし煉火石師〔二29オ〕、かひこ露〔二27オ〕、かひて買入〔二27ウ〕、かひな髻〔二26オ〕、かひる簪〔二27オ〕、きらひ嫌〔二70ウ〕、こたへ答〔二58ウ〕、ことはぎ諺〔二60ウ〕、こひびと恋人〔二60ウ〕、こへち肥地〔二59ウ〕、さひひい幸〔二68オ〕、しほ塩〔二77ウ〕、しほつぼ塩壺〔二79ウ〕、しほどき潮時〔二79オ〕、すひもの薬〔二91ウ〕、せほね背骨〔二88ウ〕、そこひ内障眼〔二36オ〕、ちりはらひ塵拂〔二19ウ〕、つれそひ配偶〔二38ウ〕、できばへ出来栄〔二63オ〕、てぬくひ手巾〔二63ウ〕、とひ間〔二15ウ〕、なほ組〔二40オ〕、なはなひ索綯工〔二41ウ〕、ぬひしこと縫仕事〔二21ウ〕、ぬひはくし縫箔師〔二21ウ〕、はざはひ禍〔二8ウ〕、はやりやまひ流行病〔二9ウ〕、ふるひ飾〔二56ウ〕、むくひ報〔二43ウ〕、よはさ弱〔二31オ〕、よろひ鎧〔二31ウ〕、わらひ笑〔二24ウ〕、あひて相手〔二81オ〕、いきおひなき勢ナキ〔二5ウ〕、いそぎのつかひ急ノ使〔二5オ〕、いつはる偽ル〔二3ウ〕、うけあふ請合フ〔二57ウ〕、うけをふ請負フ〔二56ウ〕、うたがはしき疑ハシキ〔二57オ〕、うたがひ疑〔二55オ〕、

うたがふ疑フ〔二57オ〕、うへに上ニ〔二57ウ〕、うまをひ馬覆
ヒ〔二56オ〕、うらなひト占〔二55オ〕、うるほひ潤ヒ〔二56オ〕、
かすがひ鏡〔二30ウ〕、かはりやすき替り易キ〔二34オ〕、かへ
りておそふ返りテ襲フ〔二34ウ〕、かるぐちいふ軽口云フ〔二
34ウ〕、かはかす乾カス〔二34オ〕、かはかみ河神〔二32オ〕、
かはせてがた為替手形〔二31ウ〕、かはせみ魚狗〔鳥ノ名〕〔二32
オ〕、かはりやすき替り易キ〔二34オ〕、きそふ腕フ〔二91オ〕、
きらふ嫌フ〔二91ウ〕、くつのちりはらひ番ノ座払ヒ〔二60オ〕、
くひきる食切ル〔二62ウ〕、くひな換鶏〔二61オ〕、こたへる答
ヘル〔二75ウ〕、このあひだ此間〔二75オ〕、さからふ逆ヲフ〔二
86ウ〕、したがふ従フ〔二102オ〕、すなはち即チ〔二115ウ〕、そ
へる添ル〔二46オ〕、たがひに互ニ〔二40オ〕、たくわへ貯〔二
38ウ〕、たたかひにかつ戦ニ勝ツ〔二40ウ〕、た、かふ戦フ〔二
42ウ〕、たとへ譬へ〔二42オ〕、つたはる傳ハル〔二48ウ〕、つ
ひやす費ス〔二48オ〕、つもりちがひ韻違ヒ〔二47オ〕、てかひ
のうま手飼ノ馬〔二79オ〕、であふ出逢フ〔敵ニ〕〔二80オ〕、で
きそこなひ出来損ヒ〔二79オ〕、ととのへる整ル〔二17ウ〕、と
らへる捕ヘル〔二17ウ〕、とりあへず取敢ス〔二18ウ〕、とりか
へ取替〔二16ウ〕、ならふ做フ〔二51ウ〕、にあふ似合フ〔二11
ウ〕、にがほかくひと似顔書人〔二11ウ〕、になふ荷フ〔二12オ〕、

にはひだま句玉〔二11オ〕、ぬくひけす拭ヒ消ス〔二23ウ〕、ぬ
ひいと縫糸〔二23オ〕、ぬふ縫フ〔二23ウ〕、ひらふ捨フ〔二108
オ〕、ふるひ震ヒ〔二70オ〕、ふるへる震ヘル〔二71オ〕、みう
しなふ見失フ〔二95ウ〕、みおぼへ視覚〔96ウ〕、みまふ見舞フ
〔二95オ〕、むかふに向フニ〔二54ウ〕、めあらひくすり目洗葉
〔二93オ〕、もちさは精竿〔二110ウ〕、もちひ用ヒ〔二110オ〕、
もとゆひ元結〔二110オ〕、よこぶへ横笛〔二36オ〕、あとをおふ
跡ヲ追フ〔二109ウ〕、あまりおほく余り多ク〔二109ウ〕、ことこ
とくおはりて悉ク終リテ〔二107オ〕、さひはいをうしなふ幸ヲ
失フ〔二160ウ〕、ぬひとめる縫留ル〔二131オ〕、むかひをやる迎
ヲ遣ル〔二147ウ〕、ゆるしをこふ免シヲ乞フ〔二162オ〕、わりか
へしをあたへる割返シヲ与ヘル〔二137オ〕

4、居る

「居る」の仮名遣いに、「をる」を用いられているのは、「お
さまりてをる納リテ居ル〔二26ウ〕、やせてをる瘦テ居ル〔二
64ウ〕」の二例のみであり、それに対して「おる」と表記され
ている例に次のものがある。

いきておる活テ居ル〔二3オ〕、かんかうしておる勘考シテ居

ル〔二35オ〕、くじしておる公事シテ居ル〔二62オ〕、くもつて
おる曇テ居ル〔二62ウ〕、しつておる知テ居ル〔二104ウ〕、すい
ておる好テ居ル〔二115ウ〕、そばにおる側ニ居ル〔二46ウ〕、に
ておること似テ居ルコト〔二12ウ〕、まつておる待テ居ル〔二
66ウ〕、いきておるひと活テ居ル人〔二11ウ〕、えふておる酔テ
居ル〔二157ウ〕、のみこんでおる呑込テ居ル〔二149オ〕、はなし
ておる嘸シテ居ル〔二120オ〕、まじかくおる間近ク居ル〔二152
オ〕、まぢうけておる待受テ居ル〔二152ウ〕、みにくきありさま
におる醜キ有様ニ居ル〔二163オ〕

B、字音仮名遣い

漢字音の表記に関して、本論文では、有尾韻・無尾韻、入声
音、鼻音など、仮名が用いられるようになって、生ずる増えてき
た「慣習」のような特徴については、検討しない。主に
「an」「ou」「eu」のような長音の側面から垣間見る。

1、開合・長音

「開合の乱れ」は鎌倉時代より発生し、室町時代には混乱の
度を増し、江戸前期には完全に開合の区別を失うに至っている。
『袖珍英和節用集』の仮名遣いには、「an」系のものが多用

されているのは次の用例で分かる。「an」系の次に多いのは
「eu」系である。

いちきやう一行〔一3オ〕、うつこんかう鬱金香〔一46ウ〕、お
くびやう臆病〔一23ウ〕、かうかつ狡猾〔一28ウ〕、かうぐ香具
〔一27オ〕、かうし格子〔一26ウ〕、かうせい行星〔一27ウ〕、
かうまん高慢〔一28ウ〕、かうろう香爐〔一29ウ〕、がてやう鶯
〔一29オ〕、きかう季候〔一70ウ〕、きやうへき胸壁〔一71ウ〕、
ぐんびやう軍兵〔一50ウ〕、けうし教師〔一54ウ〕、こきやう古
郷〔一61オ〕、さいしやう宰相〔一69オ〕、しうしやう愁腸〔一
80ウ〕、じやう情〔一78オ〕、ししやう師匠〔一78ウ〕、してや
う鶯鳥〔一80オ〕、じやうじゆ成就〔一81ウ〕、しやうり勝利〔一
79オ〕、しゆうしやう出生〔一82オ〕、しんらう辛勞〔一79オ〕、
せうちう焼酎〔一89ウ〕、せうやう道先〔一89ウ〕、せんたう煎
湯〔一89ウ〕、そうちやう増長〔一36ウ〕、だいだう大道〔一34
オ〕、たう塔〔一32オ〕、だうり道理〔一33ウ〕、ちやうぎ定矩
〔一19オ〕、てやうふく朝服〔一63ウ〕、てやうろう嘲哂〔一63
ウ〕、へんきやう返響〔一14ウ〕、みやうにち明日〔一76ウ〕、
りやうじくわん領事官〔一20ウ〕、りやうしん両親〔一20ウ〕、
りやうち領地〔一20オ〕、れいはいだう礼拝堂〔一35ウ〕、れう

し狷師〔二35オ〕、あんせう暗礁〔二82オ〕、かうり高利〔二30ウ〕、けうし狂詩(狂歌)〔二68オ〕、けうはう教法〔二67オ〕、けつじやうする決定スル〔二68ウ〕、ちはう地方〔二19ウ〕、わうたう黄道〔二28オ〕、ひつきやう畢竟〔二166ウ〕

2、合拗音

クワの直音化(カ)の例は少ないのは特徴である。

くわいかふ会合〔二50ウ〕、くわいふく快復〔二50ウ〕、くわがくしや化学者〔二50ウ〕、くわしや菓子司〔二50オ〕、くわもん火門〔二50オ〕、くわやく火薬〔二50オ〕、げくわいしや外科医者〔二55ウ〕、げつくわう月光〔二55ウ〕、こうくわい後悔〔二61オ〕、こぐわつ五月〔二60オ〕、さんぐわつ三月〔二69ウ〕、じういちぐわつ十一月〔二82ウ〕、しうくわい集會〔二81ウ〕、じうぐわつ十月〔二81オ〕、じうにくわつ十二月〔二82オ〕、しぐわつ四月〔二79オ〕、しちぐわつ七月〔二81オ〕、しよきくわん書記官〔二82オ〕、にくわつ二月〔二11オ〕、につくわう日光〔二11ウ〕、はちぐわつ八月〔二9オ〕、へんくわ変化〔二14ウ〕、ゆくわい愉快〔二73ウ〕、りやうじくわん領事官〔二20ウ〕、ろくぐわつ六月〔二4ウ〕、いつくわ一和〔二1オ〕、きんせんく

わ金箋花〔二90オ〕、ぎしくわん議事官〔二88オ〕、ゆくわいなる愉快ナル〔二92ウ〕、わうくわん往還(車道ナド)〔二28オ〕、あんぐわいに案内二〔二159ウ〕、ふくわいにする不快ニスル〔二154オ〕

三、おわりに

『袖珍英和節用集』には、仮名遣いとして独自の統一性を求める傾向が見られるが、次のような混用などの問題例もある。

1、ヲーオーホの混用

打倒ス うちたをす〔二57ウ〕、吹キ倒ス ふきたをす〔二71オ〕

扣キ倒ス た、きたほす〔二41ウ〕

引倒ス ひきたおす〔二108ウ〕

切り落ス きりをとす〔二90ウ〕、衝落ス つきをとす〔二48ウ〕

投落ス なげおとす〔二52ウ〕、削り落ス けつりおとす〔二153ウ〕

氷ル こおる〔二76ウ〕

水 こほり〔二58ウ〕

尚ヨク なほよく〔二50ウ〕

尚 なを〔二51オ〕

「OW/O」の混同、更に「ハ行転呼音」による語中音の

「HO/OW」の同音化の結果である。

2、ヘーエの混用

支ヘル さ、へる〔二86ウ〕

支エル さ、ゑる〔二87ウ〕

「ハ行転呼音」の結果、「HE/WE」が同音になったため、

表記が混乱したものである。

3、ハーワの混用

終 おはり〔二23オ〕

嘶ヲ終ル はなしをおわる〔二119オ〕

「ハ行転呼音」の結果、「HA/WA」が同音になったため

ある。

4、ズーツの混用

最僅ニ もつともわずかに〔二110ウ〕

最僅ニ もつともわづかに〔二111ウ〕

鼠色 ねずみいろ〔二39ウ〕

鼠 ねづみ〔二39ウ〕、地鼠 ぢねづみ〔二20オ〕

湖 みずうみ〔二76オ〕、水槽 みずため〔二76オ〕、水準

みずもり〔二76オ〕

水時計 みづどけい〔二76ウ〕

繪図師 えずし〔二83ウ〕

海図 かいづ〔二26オ〕、系図 けいづ〔二54ウ〕、

室町中期以後、「ジ・チ・ズ・ツ」の四つの仮名は、音声上

の変化が生じ、江戸時代前期、元禄時代には中央語では「ジ」

と「チ」、「ズ」と「ツ」の区別が完全に消滅し、表記上で混同

を起こしている。上の用例は「ZUNDU」が区別が消滅したた

め、表記上が混乱したものである。